

本人中心アプローチによる障害のある子どもの 支援の輪作りに関する事例報告

—小学生へのPATH (Planning Alternative Tomorrow with Hope) の実施—

涌 井 恵
(教育支援部)

I. はじめに

本論考では、障害のあるA児（小5，ダウン症）の将来の夢の実現に向けて、何が必要かを探ること、及び支援の輪作りをねらいとして行った、本人中心アプローチの一つであるPATH (Pearpoint, O'Brein, & Forest, 2001) を用いたワークショップについて報告する。

PATHはPlanning Alternative Tomorrow with Hope（希望に満ちたもう一つの未来の計画）の略称である。PATHは1991年にカナダにおいてForest氏らがインクルージョン教育を推進するための具体的な手だてとして開発したものである (Falvey, Forest, Pearpoint, Rosenberg, 2003)。PATHでは、障害のある人本人と、関係のある多くの人が一堂に会して、障害のある人の夢や希望に基づきゴールを設定し、そのゴール達成のための作戦を立てる (干川, 2002)。PATHは、子どもの指導に関わる人が集まって情報を集め、新たな発想で目標や手だてを考える方法であり、情報の共有だけでなくアクションプラン（行動計画）を考えるということや、関係者がそれぞれの力を発揮することを目指すといった特徴を持つ (Pearpoint, O' Brein, & Forest, 2001)。

日本では、干川（2002）によって、教師の連携・協力を促す教員研修の一つとして、PATHの技法を教師達がシミュレーションするロールプレイが考案されているが、インクルージョン教育の促進をねらった本来のPATHの実施やその効果に関する研究は、現在の所、まだない。

カナダのインクルージョン場面においてPATHが成功を収めてきたように、日本においても「交流及び共同学習」を効果的に進める上で、障害のある子どもについて級友が理解し、サポート・ネットワークを形作っていく際の有力な方法となることが示唆される。

しかしながら、小学生を含む集団においてPATHを実施した場合の配慮点や課題等について明らかになっていない。

そこで、本報告では、小学5年生の障害のあるA児とその同級生や保護者等とPATHを実施する機会を得たので、その内容について報告し、特に小学生を参加者とした場合の配慮点や課題について探ることとする。

II. 方 法

障害のあるA児（小5，ダウン症）の将来の夢の実現に向けて、何が必要かを探ること、及び支援の輪作りをねらいとして、本人中心アプローチの一つであるPATHを用いた話し合いを行った。以下に具体的な方法について記した。

1. 対象児

対象となるA児は、公立小学校特別支援学級に在籍する5年生の女児であった。A児は出生時にダウン症と診断された。A児は1クラス32名の幼稚園に3年間通った後、現在の公立小学校特殊学級へ就学した。小学校には幼稚園当時の同級生も在籍している。

現在の発達の様子については、発音は不明瞭だが「おはよう」「バイバイ」などの挨拶や簡単な受け答えができる。A児の方から積極的に他児に関わることは少ない方だが、交流級の同級生や近所の子ども達から声をかけられたり、関わったりすることは頻繁にある。

在籍の特別支援学級では、1学期における個別の指導計画の短期目標として、「ボタンはめ、上履き、ズボンと上着の着脱を立って行うことができる」、「登校後の整理、下校時の準備が見通しを持って一人でできる」「文字（50音）の読み書きができる文字を増やす。動作語の理解を促す」、「数字と数量（1～10）の理解」が挙げられている。

2. スタッフと参加者

PATHの実施スタッフは、ファシリテーター1名（著者）とビデオ撮影者3名の計4名であった。

参加者は、子どもが16名（内、1名は小学2年生の男子

で、小学5年生の参加者の弟であった。その他はA児と同じ小学5年生）と、大人8名（A児の母親を含む）が参加した。大人は、A児の母親の友だちで同じマンションに住む者や、A児の学校の介助員、A児の同級生の保護者などであった。

対象児と参加者は4つの班に分かれて、それぞれ班で1つのPATHに取り組んだ。

3. 場面設定

本研究所プレイルームを利用した。ビデオは部屋の四隅に各1台ずつ計4台配置し、対象児と参加者の行動や発言を記録した。

4. PATHの流れ

大まかなPATH実施の手順はPATHのワークブック第2版（Pearpoint, O'Brein, & Forest, 2001）の通りであった。ただし、1名のファシリテーターが全体の進行をコントロールし、4つのグループがそれぞれのPATHに取り組んだこと、PATHの図への記入は参加者が行うことが本来のPATHの手続きとは異なっていた。

なお、本来のPATHでは、進行役とグラフィック記録役の2名のファシリテーターによって行われ、PATHの図への記入はファシリテーターが行うことになっている。

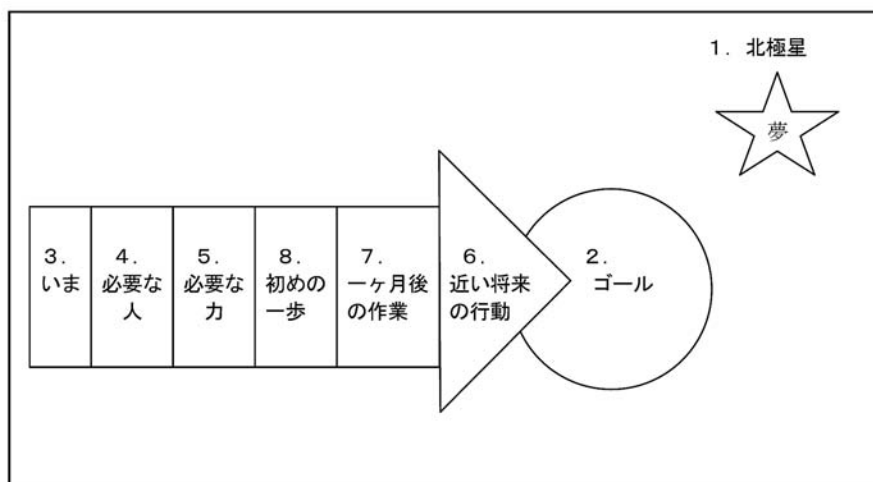
本著では、小学校の通常学級での授業における実施の可能性を探るため、上記のようにファシリテーター1名で複数の班のPATH進行を促す方式を試みた。なお、実施時間は、約3時間であった。

（1）PATHの概要説明

まず、ファシリテーターと対象児、参加者は互いの顔が見えるように車座に座った。そして、ファシリテーターが今回のPATHを「Aちゃんドリカムプロジェクト作戦会議」と名付け、参加者にねらいについて説明した。ねらいとは以下の2点であった。①夢の実現に向けて、何が必要か探り、行動計画を立てる。②サポートネットワークづくり。また、作業の具体的なイメージを掴んでもらうために、PATHの完成見本写真（齊藤, 2004）を呈示して、PATHの大まかな手順を説明した。また、この場のルールとして、「①傾聴；心で聞く。②どんな発言も尊重し、“間違い”は無い。③お茶菓子は随時飲食OK」ということを伝えた。

（2）チェック・イン：自己紹介と4つの班分け

車座に座った状態で、一人一人に①氏名、②今日呼んでほしいニックネーム、③Aちゃんとの関係やこれまでの付き合いについて話してもらった。その後、車座に座った順に1から4までの数を繰り返し割り当て、数字毎に4つの班に分かれた。



PATHのステップ

1. 北極星（夢）にふれる（夢や希望について語ること）
2. ゴールを設定する・感じる
3. いまに根ざす（どこに私／私たちはいるのか）
4. 夢をかなえるために誰を必要とするのか
5. 必要な力を知る（必要な力とそれを増す方法は？）
6. 近い将来の行動を図示する
7. 一ヶ月後の作業を計画する
8. 初めの一步を踏み出す

図1 PATH（Planning Alternative Tomorrow with Hope）の概要図
〔Pearpoint, O' Brein, & Forest（2001）を参考に筆者が作成〕

(3) PATHステップ1：北極星（夢）にふれる（夢や希望について語る）

ステップ1では、A児の北極星（夢）について参加者が語ることが課題として与えられた。ここでの北極星とは、人生の羅針盤とも言え換えられるだろう（干川・肥後, 2002）。北極星とは、夢、希望、未来の種、ビジョン、普通でないこと、PATHの参加者を思わず早起きしてしまうように駆り立てるものである（Pearpoint, O'Brien, & Forest, 2001）。紙の上に書き表すことではなく、参加者同士話し合うことが大切であるとされ、ブレーンストーミングと同様、思ったことを語り合い、現実から離れて夢を語り合うことが求められた。なお、話し合った内容を図1 PATHの手順概要の図中1の部分に記入した。

(4) PATHステップ2：ゴールを設定する／感じる

夢の実現日を図1の2の部分に記入した。具体的にはA児が6年生の3月、すなわち1年5ヶ月後の年月を記入した。

夢の実現に向かって6年生の3月になったときに、何をしているか、何を感じているかを話し合った。ただし、その内容はポジティブ（Positive）で可能なもの（Possible）という制限があった。話し合いがうまく進まない場合、ファシリテーターは未来にいる各自について現在進行形の言葉を使って自己紹介するよう促した。

(5) PATHステップ3：今に根ざす私／私たちはどこにいる？

現在の年月日を図1の3の部分に記入した。本人の現在の状況とそれをどう感じているかについて話し合った。ステップ2で話し合ったゴールに比して今がどのような状況にあるのかを話し合った。

(6) 休憩

約10分間の休憩時間をとった。

(7) PATHステップ4：夢をかなえるために誰を必要とするか

夢をかなえるために誰を必要とするか、関係者のリストアップをした。

(8) PATHステップ5：必要な力 必要な力を増す方法を見つける

個人として／チームとして、必要な力や、必要な力を増す方法を見つけるよう話し合った。

(9) PATHステップ6：近い将来の行動の図示

近い将来（今回は半年後）の年月日（平成20年4月15日）を図1の6の部分に記入した。そして、半年後、夢が現実のものとなっているためにはどんな行動をとっているかについて話し合い、それを記入した。

(10) PATHステップ7：1ヶ月後の作業

この話し合いが終わって、一ヶ月後、各メンバーは何を

するかを話し合って記録した。誰が何をいつするのか具体的に記述した。

(11) PATHステップ8：初めの一步

この話し合いが終わって、各メンバーはまず初めに何をするかを話し合って記録した。

(12) チェック・アウト：振り返り

全体で、感想を出し合った。またA児やA児の母親からも一言感想を述べてもらった。

(13) 記念撮影（全員と各班）

対象児と参加者全員で記念撮影を行い、その後、班毎にPATHの完成図と共に写真を撮影した。また、A児と母親から参加者への御礼としてお菓子が一人一人に配られた。

5. 保護者へのインタビュー

PATHの実施から約2ヶ月後に、母親からその後のA児や母親自身、参加者の変化について聴取した。

Ⅲ. 結 果

1. 班分け

Ⅱの方法で述べたようにランダムに班分けを行った結果、次のような4つの班に分かれた。その内訳は次の通りであった。

- 1班：子ども5名（男子2名、女子3名）大人2名（内1名はA児の学校の介助員）
- 2班：子ども5名（男子2名、その内1名は小2、女子3名）大人1名。
- 3班：子ども3名（男子1名、女子2名）大人3名（内1名はA児の母親）
- 4班：子ども4名（男子1名、女子3名その内、1名はA児）大人2名（内1名はA児の学校の介助員）

2. PATHの様子

各班のPATH完成図を図2～6に示した。

まず、「PATHステップ1：北極星（夢）にふれる（夢や希望について語る）」では、ファシリテーターはこれまでの参加者とA児とのエピソードの中から、A児の将来の夢について想像したり、直接A児に尋ねたりしても良いと教示した。どの班もA児との関わりのエピソードから夢を想像するのは難しい様子であった。各班の子ども達はA児の周りに行き、いろいろ尋ねていた。しかし、A児のコミュニケーション能力の乏しさから、本人へのインタビューから情報を引き出すのは難しかった。

そこで、ファシリテーターはA児の母親に、「Aちゃんの好きなことをみんなに教えてあげて下さい」と教示した。

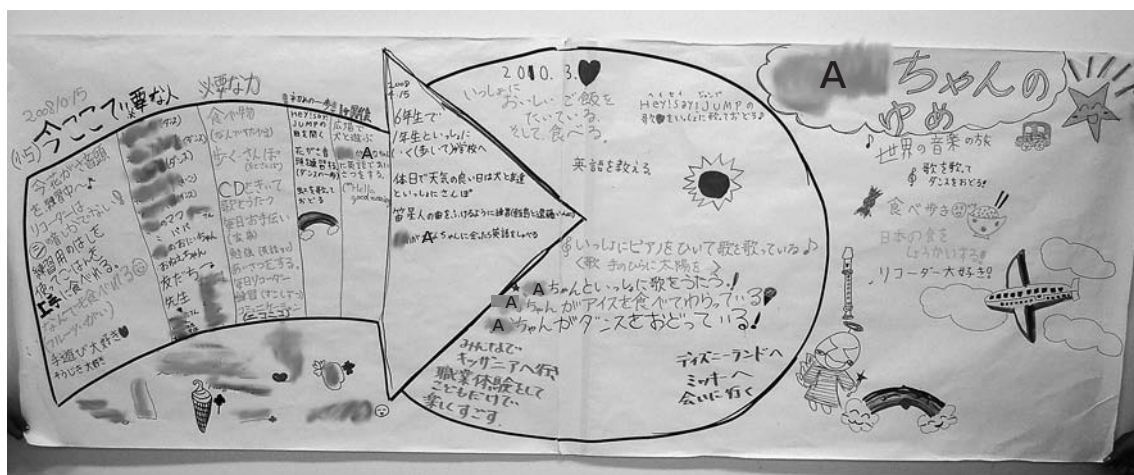


図2



図3

これに対し、母親はこだわりがあって、カーペットがめくれているのが気になる、本のページがボロボロになっているのもダメで、テープを貼ってくれと要求する、家のトイレにタオルが掛かっているのが嫌だ、といったA児の最近の苦手なことを述べた。これに対し、ファシリテーターは再度「現実から離れてもいいので、夢を語りましょう。もし、魔法使いがどんなことでも3つ夢をかなえてくれるとしたら、何を願いますか？」と教示した。

すると、母親は「母としては、(A児が) いろんな国に行って、いろんな物を見られたらいい。夢のある仕事がいいな。ディズニーランドに行ったことは無いが、掃除とかしながら、そこにきている人が楽しんでいる時間を過ごしているのを見ている……。」と述べた。この話を聞いてから、各班ともA児の具体的な夢のイメージが浮かぶようになり、作業が進んでいった。

「PATHステップ2：ゴールを設定する／感じる」では、夢の実現に向かって6年生の3月になったときに、何をしているか、何を感じているかを話し合った。この際、その内容はポジティブ (Positive) で可能なもの (Possible)

という制限があったが、子ども達に言葉の意味について説明する必要があった。ポジティブとは、「前向きなこと」、可能なもの、また、ポッシブルとは、「現実的なこと、できそうなこと」と説明し、ポジティブ (Positive) で可能なもの (Possible) とは、現実的だけど、夢のあることと説明した。

「PATHステップ3 今に根ざすー私／私たちはどこにいる?」では、何について考えればよいのか、どのグループもピンときていない様子だった。そこで、ファシリテーターは、2班の「お母さんといっしょにお菓子作り!」という夢を例に取り上げ、「今、お菓子を作った経験はどうか? 何ができるかな? 考えてみて。夢と今のギャップを書いてみよう」と教示した。また、ネガティブな事柄や気持ちも書いて良いと教示した。PATHのワークブック第2版 (Pearpoint, O'Brein, & Forest, 2001) では、今の感情とステップ2で感じる感情についても考えるのも良いと書かれているが、どの班も、感情についての記述は見られなかった。

「PATHステップ4：夢をかなえるために誰を必要とす

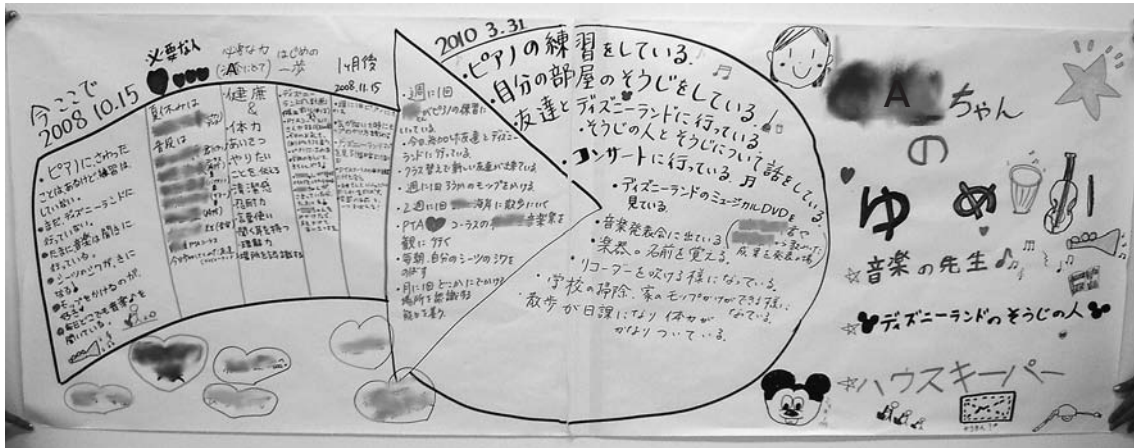


図4

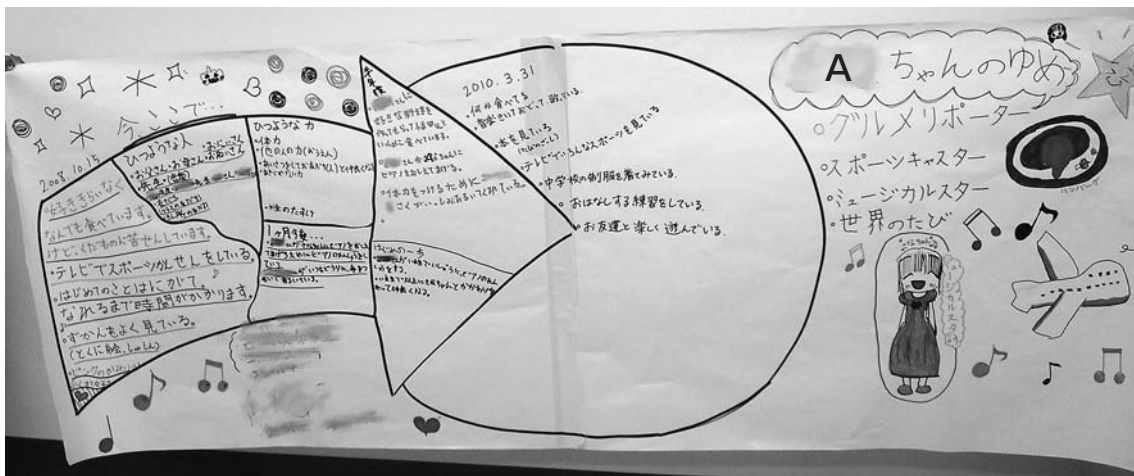


図5

るか」はどの班も比較的スラスラと作業が進んだが、以降のステップでは班により、記述量にばらつきが見られた。また、班によっては話し合いが停滞してしまい、大人が考えた誘導的な質問をして、答えを書かせたり、大人達が考えた答えを子どもに書かせたり、というような場面も見られた。

PATH終了後の振り返りでは、参加した子ども達の中から、疲れたという感想や、今まで知らなかったAちゃんの好きなこととかが分かったという感想が挙げられた。

3. 保護者へのインタビュー結果

PATHの実施の2～4ヶ月後に行われた計2回の教育相談において、母親から感想やその後の変化についてインタビューした結果を以下に箇条書きした。

<感想>

- ・いつもできないことばかりに目がいってしまうので、小さな事でできることに焦点を当てるのがおもしろかった。できることを少しずつやっていけばいいのかなと

思った。

- ・PATHでA児の応援団作りができ、中学校に行って違うと思う。
- ・参加した子ども達は今回小学5年生だったが、この年齢がラスト・チャンスだった。小学6年生だと、A児とのギャップが大きくうまく行かなかったと思う。ふざけたりしながらも、小学5年生では楽しくできた。低学年から毎年やっていくと、中学校などでの友だちからのサポートが変わってくると思う。

<A児について>

- ・自分のためにみんなが集まってきてくれていると言うことを理解し、肌で感じ取っていた様子。最後の挨拶で、母親の言葉かけの復唱ではあったが挨拶できた。普段ならやらないのに。
- ・御礼のお菓子を渡すときも、素直に一人一人に「ありがとう」と言っていた。
- ・今まで、同じマンションのある一人の女の子（参加児のひとり）と一緒に学校に行きたがり、待つことがあったが、PATHの以後は、その女の子のグループ全員（参

加児)を待つようになった。

＜PATHの後、家庭でやり始めたこと＞

- ・食事のお箸を配る係(土・日)
- ・自分の身の回りのこと(シーツのしわを自分で伸ばすなど)

Ⅳ. 考察－PATHの実施に関する効果と課題－

PATH終了後の振り返りでは、参加した子ども達の中から、今まで知らなかったAちゃんの好きなこととかが分かったという感想が挙げられた。また、A児についても、PATHの後に、参加児だった同じマンションの同級生グループと一緒に学校に行きたがるようになるなど、友だち関係に一定の変化が生まれたといえるだろう。

一方、PATHの実施に関する課題として、以下の三つが挙げられる。

一つ目は、班による作業の深まりに差があり、複数のグループを1名のファシリテーターが進行していく上で、工夫が必要であることが指摘できる。通常学級で実施する場合は、最初に6名程度のコア・グループでPATHを実施し、その後そのコア・グループのメンバーをリーダーとした班を作り、あらためて学級全体でPATHを実施する、という二段構えの方法も考えられる。

二つ目は、ファシリテーターが作業内容を説明する際に、PATHのワークブック第2版(Pearpoint, O'Brein, & Forest, 2001)通りの教示では、小学5年生には理解が難しい言葉があった[ポジティブ(Positive)で可能なもの(Possible)]。子どもの年齢に合わせて、説明表現を考慮する必要があるだろう。

三つ目は、A児の参加度である。PATHの実施に関しては、母親からのA児についての情報提供が大変有用で、各班の作業に大変役立った。その反面、言葉でのコミュニケーションが難しいA児からの情報発信がほとんどできなかったという点で課題が残った。これについては、次のようなアイデアが考えられる。前もって、A児に母親やファシリテーターが将来の夢や希望、好きなこと等について聞き取りをしておき、その内容を絵や写真などで示してポスターを作る。これをステップ1の場面でA児と共に母親やファシリテーターが参加者に発表する、というアイデアである。

Ⅴ. まとめ

本著では、小学5年生で、ダウン症のA児の将来の夢の

実現に向けて、何が必要かを探ること、及び支援の輪作りをねらいとして行った、本人中心アプローチの一つであるPATHを用いたワークショップについて報告した。このPATHワークショップには、A児の近所に住む人々や同じ小学校の同級生が参加した。その内容及びA児の母親へのインタビューの結果についてまとめた。

PATHの実施後、A児の友達関係にポジティブな変化が見られた。また、小学生を参加者とした場合の課題として、①参加人数の問題、②ファシリテーターの教示表現の難易度、③障害のある子どもの意思表示手段が挙げられた。

文 献

- 1) Falvey, M. A., Forest, M., Pearpoint, J., & Rosenberg, R. L. (2003) All my life's a circle: using the tools: circles, MAPS & PATH (New expanded edition; 2nd Ed., 3rd printing, 2003), Inclusion Press, Toronto.
- 2) 干川隆 (2002) 教師の連携・協力する力を促すグループワーク－PATHの技法を用いた試みの紹介－. 知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室, 一般研究報告書「知的障害養護学校における個別の指導計画とその実際に関する研究(平成11年度～平成13年度)」, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 43-47.
- 3) 干川隆・肥後祥治 (2000) パートナリーシップの原動力としての夢: カナダにおけるMAPSとPATHの紹介. 平成10年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤(A)(2)) 研究成果報告書: 障害児教育分野における協力・連携関係パートナーシップの形成に関する調査研究(課題番号: 10041049, 研究代表者: 落合俊郎), 44-50.
- 4) Pearpoint, J., O'Brein, J., & Forest, M. (2001) PATH: Planning Alternative Tomorrows with Hope: A Workbook for Planning Possible Positive Futures. (2nd Ed., 4th printing, 2001), Inclusion Press, Toronto.
- 5) 齊藤宇開 (2004) 長期研修におけるPATHの技法を用いたワークショップ. 知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室, 一般研究報告書「知的障害のある子どもの担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究－個別の指導計画の作成に焦点をあてて－(平成14年度～平成15年度)」, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所, 43-45.